

資料5 一茶句の偽作、贋作

小林一茶は、生涯に2万句を越える俳句をつくった。一茶の句であるか否かは、1句日記など一茶の真筆が残されているか、2一茶の生きていた時代の出版物に掲載されているの条件を満たしているかで判断される。ところが世の中には、この条件のいずれも満たさないのに一茶の句としれ流布されている句がいくつかある。

信濃では月と仏とおらが蕎麦

信州と言えば善光寺と信州ソバである。長野県観光の宣伝文句として最高の句である。「俳人一茶」(1898)、「俳諧寺一茶」(1910)では、一茶の作として掲載され、昭和初期までは一茶の句とされていた。亀井文夫の秀作映画「信濃風土記より 小林一茶(1941)」の冒頭を飾る俳句でもある。

しかし、後の研究でこの句は一茶の句ではなく、明治末期の一茶研究家の中村六郎が一茶の句「そば時や月の信濃の善光寺」と俳文集「おらが春」を組み合わせて作ったというのが定説になっている。

<http://crd.ndl.go.jp/GENERAL/servlet/detail.reference?id=1000025521>

親は死ね子は死ねあとで孫は死ね

殿様が孫の誕生祝いに一茶を呼び寄せ「めでたい句を作ってくれ。」と頼んだ。すると一茶は、この句を詠んだ。殿様は「祝いの席に何とも不吉な句を作った。」と憤慨し一茶をたたき出した。ところが、後に「親、子、孫と正しい順序で死んでいくことは一番幸せなこと。その順序が狂うことは一番不幸なこと。これほどめでたい句はない。」と知った。

いくつかの本に一茶のつくった句として紹介されているが、一休が作った句として紹介されている例もある。一茶と一休、二人とも歴史上の有名人であり、似通った点も少なくはない。

昼からはちと影もあり雲の峰

古典のロマンを生徒に伝える国語の指導の実践として取り上げられている句である。

- ①この句を提示し、
- ②ひらがなでかかせ、
- ③この句にかくれている動物を問い、
- ④「ひる」「か」「はち」「とかげ」「あり」「くも」「のみ」の七種類の動物が隠れていることを示し、子どもたちの俳句への興味を高めるといのである。

なるほど子どもたちに指導するには面白いと思うが、これが一茶の句として紹介されている点はいただけでない。一茶の句にこの句の類似句はないからである。

<http://www.d1.dion.ne.jp/~sunsun/kokugo-1.htm>

以上、これらの句が一茶の句とされたのは、一茶の句は奇知と風刺にとんだものが多いからであろう。他に次の2句も一茶の句とされるが一茶の句ではない。

何のその百万石も笹の露

御負なり将棋の駒も駒の内